

令和2年度「高校生防災リーダー養成事業」における視察研修

大分大学減災・復興デザイン教育研究センター
防災コーディネーター 板井 幸則

大分県教育庁学校安全・安心支援課の事業により、令和2年度防災教育モデル実践校の竹田高校と従前のモデル校であった杵築高校と臼杵高校の生徒や教職員等と共に、東日本大震災の被災地である宮城県と岩手県に8月10日から12日(2泊3日)の日程で、大分県防災教育推進委員として参加しました。

今回の目的は、震災遺構の見学や語り部からの聞き取り(当時の釜石東中学校の生徒や人命捜索活動を行った消防隊員)また現地学習などをを行い、大規模災害の現状や事前の防災対策の重要性、復興に向けた取組みなどを体験的に学習することで、防災意識の向上を図ることを目的として行われました。

【1日目】仙台市立荒浜小学校(震災遺構)訪問

東日本大震災において、児童や教職員、住民など320人が校舎に避難し、2階まで津波が押し寄せました。この津波での被害を伝えるために、校舎を震災遺構として公開し教訓を後世に伝えている場所を視察しました。



【2日目】陸前高田市「奇跡の一本松」

震災後、この松の木を保護する活動が続けられたものの、根が腐り枯死と判断されました。その後、震災からの復興を象徴するモニュメントとして残し、現在は復興シンボルとなっています。



釜石市「うのすまいトモス」

東日本大震災の記憶や教訓を将来に伝えるため、当時の鶴住居地区防災センター跡地に「いのちをつなぐ未来館」が建設され、「釜石の奇跡」となった震災前の防災教育の写真や震災直後の写真などを展示し、震災伝承と防災学習のための施設で研修を行いました。この施設では、当時釜石東中学校の3年生であった「菊池のどかさん」から震災当時の避難したお話を伺いました。



また、移動中のバスの中では、私より当時の鶴住居の被災状況や人命捜索の苦労話などをお話ししました。

リーダー交流学習会

宿泊先の研修会場では、菊池のどかさんを講師にお迎えし、震災前の防災教育や震災当日の避難行動及び避難所内での生活など震災の裏話などお聞きしました。



また、私からは、大分県緊急消防援助隊で活動した内容について当時の写真などを用いて説明しました。

最後に、学校安全・安心支援課の職員がエヌグラフー※の手法により、2日間で学んだことを振り返り整理しました。

※エヌグラフー:集団や社会の行動様式をフィールドワークによって調査・記録する手法およびその記録文書のこと

【3日目】宮城県立多賀城高校(防災教育先進校)

多賀城高校・災害科の生徒の案内で、被災した場所のフィールドワークを実施しました。沿岸部から1キロほどの国道まで津波が押し寄せ、小雪が舞う中、国道に架かる歩道橋で一夜を明かした高校生がいたなど、当時の状況を語って下さいました。



3日間の研修ではありましたが、津波の被災経験のない生徒たちは、研修前には津波についてイメージがつかないようでしたが、実際に視察してみると想像を遥かに超えた津波災害の脅威を見せつけられ、家庭や学校で仲間に伝えたいなど防災意識の向上に繋がったと思いました。

東日本大震災から今年で10年を迎えますが、私も被災地で活動した者としてあの日の出来事を語り継いでいくことが、犠牲となられた皆様への恩返しだと改めて心に強く誓いました。

センター概要

センター長	小林 祐司 (理工学部・教授)	専門: 都市計画・都市防災
センター次長	鶴成 悅久(センター主担当教員・准教授)	専門: 土木工学
防災コーディネーター	板井 幸則 (救急救命士・元臼杵市消防長)	
事務所掌	研究推進部 産学連携課 産学連携係	
事務補佐員	杉田 智美、佐藤 一征、戸田由美子	

学内兼任教員

土居 晴洋 教育学部・教授	専門: 人文地理学・防災教育
田中 修二 教育学部・教授	専門: 近代日本美術史
川田菜穂子 教育学部・准教授	専門: 住居学・建築計画学
小山 拓志 教育学部・准教授	専門: 自然地理学・地理教育
本谷 るり 経済学部・教授	専門: 経営組織論・経営戦略論
大井 尚司 経済学部・教授	専門: 地域交通計画・観光
山浦 陽一 経済学部・准教授	専門: 農業経済学
下村 剛 医学部・教授	専門: 医療情報学・災害医療
石井 圭亮 医学部・准教授	専門: 救急災害医療
奥山みなみ 医学部・助教	専門: 獣医学・野生動物学
花田 克浩 医学部・助教	専門: 生物物理学・食品科学
田上 公俊 理工学部・教授	専門: 熱工学・燃焼工学
菊池 武士 理工学部・教授	専門: ロボット工学・生体支援
衣本 太郎 理工学部・准教授	専門: 電気化学・材料化学
西口 宏泰 全学研究推進機構・准教授	専門: 機器分析科学・光(触媒)化学

客員教授・客員准教授(学外)

三谷 泰浩	九州大学・教授 (工学研究院附属アジア防災研究センター)
西 隆一郎	鹿児島大学・教授
平岡 透	長崎県立大学・教授
山本健太郎	西日本工業大学・准教授
宮野 幸岳	大分県立芸術文化短期大学・准教授
亀野 卓三	大分工業高等専門学校・名誉教授
小西 忠司	理工学部客員教授・NPO法人あなたにくうかんおおいた

客員研究員(学外)

石黒 聰士	愛媛大学・准教授
手代木功基	県南大学・講師
内山庄一郎	国立研究開発法人 防災科学技術研究所: 茨城県
大島 郁夫	(株)ソイルテック: 大分市
大塚 哲哉	九州建設コンサルタント(株): 大分市
中濃 耕司	東亞コンサルタント(株): 大分市
川原 太郎	(株)日建コンサルタント: 大分市
橋本 哲男	(株)日建コンサルタント: 大分市
山本 竜伸	(株)ザイナス: 大分市
吉田 彰	SAPジャパン(株): 東京都
佐野 寿聰	アジア航測(株): 東京都
臼杵 伸浩	アジア航測(株): 東京都
牧 澄枝	アジア航測(株): 東京都
財津 宏一	日本放送協会: 東京都

大分大学減災・復興デザイン教育研究センター

Center for Education and Research of Disaster Risk Reduction and Redesign

News Letter

学生災害ボランティア講習会を行いました

5月27日(水)にオンラインにて学生災害ボランティア講習会を減災・復興デザイン教育研究センター(以下、センター)と学生・留学生支援課が共同で行い、学生約200名が受講しました。本学学生が実際に被災地へ災害ボランティアとして参加・活動をする場合は、基本的に本講習の受講が必須条件となっています。例年、実習(土のうづくり)を交えた対面での講習会を行っていましたが、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、Zoomによるオンライン講習会となりました。

講習会では、NPO法人リエラ代表理事の松永鎌矢さん(大分大学OB)から災害ボランティアの必要性やボランティアを行うときの心構え、注意事項についての説明に続き、経済学部4年の田中慎一さんからボランティアの体験談や自身が活動している学生CERDの紹介を行いました。センターからは活動時の服装、土のうの作り方について映像を交え説明し、昨年度講師を務められた尾畠春夫さんからのコメントを紹介しました。最後に、医学部の下村剛教授から災害ボランティアにおける感染症対策について医学的な見地から説明がありました。将来災害医療に携わりたいという看護学科の学生や学校の先生になるために取つておいたほうがよい資格について尋ねる学生など、興味関心の高い学生が多く、有意義な講習会となりました。



「令和2年7月豪雨」災害ボランティア活動を行いました

センターでは、大分県社会福祉協議会と調整を行い、「令和2年7月豪雨」による大分県内の被災地へ学生及び教職員による「災害ボランティア」を派遣しました。

第1陣として7月22日(水)及び23日(木)は玖珠郡九重町、26日(日)は日田市天瀬町に学生延べ17名、教職員延べ19名を派遣し、さらに第2陣として8月1日(土)・8月2日(日)は日田市天瀬町へ学生延べ24名、教職員延べ12名を派遣しました。

今回、派遣するにあたり新型コロナウイルス感染症対策のため1回の人数を調整し、事前に「学生災害ボランティア講習会」の研修を受けた学生らの少数精鋭の派遣としました。作業に関しては大分県社会福祉協議会・被災地の社会福祉協議会と作業内容の調整を行い、民家の床下の泥出しや旅館の床の拭き上げ等の作業や「天ヶ瀬橋」周辺の堆積物の除去や運搬、救援物資の片付け、被災者のニーズ調査及び炊き出しの補助、旅館の駐車場の泥出し及び洗浄等を行いました。

第1陣の時は梅雨明け前で雨天の中での作業もありましたが、第2陣の時は炎天下の下、熱中症や新型コロナウイルス感染症対策を十分に行いながら被災地の復旧に貢献しました。



大分大学学生CERDの活動について

学生CERD代表 山口 泰輝

大分大学学生CERD(以下、学生CERD)は、センターの協力・助言のもとに災害ボランティアを中心に活動するほか、被災地の復興支援から防災・減災イベントの企画・実施や学内外防災訓練への協力などを行っている学生団体です。2020年は主に令和2年7月豪雨によって被災した日田市天瀬町や中津江村、玖珠郡九重町にて復興支援活動を行っています。

発災直後は学生災害ボランティアとして日田市天瀬町や玖珠郡九重町にて民家の床下の泥出しや橋梁の清掃などの作業を行いました。被災地の状況を目の当たりにすることで、災害への恐怖心となるしかなければならないという使命感を抱きました。

発災から数ヶ月経った現在では「心の復興支援」として被災者の方々との交流会を企画し、今後の生活に関する不安や悩み、願いなどを聞き出した上で、学生CERDにどんなことができるのか模索しています。10月上旬に開催した交流会では被災者の方々と料理をしたり、コーヒーを片手に談笑したりする空間を作り出すことができました。

学生CERDは「防災・減災に関する知識の構築」を目指し、活動しています。今後は被災地での活動だけではなく、防災キャンプや学習会などを開催し、楽しんで防災・減災について学べる組織にしていきたいと考えています。



特集

大分県令和2年7月豪雨災害に関するセンターの対応・支援活動について

本誌に掲載される詳細についてはセンターホームページで公開しています。 <https://www.cerd.oita-u.ac.jp/data/pdf/r2rain.pdf>

センターにおける令和2年7月豪雨災害への対応

7月6日から8日にかけて梅雨前線が九州付近に停滞し西部、北部、中部を中心に24時間降水量が250mmを超える椿ヶ鼻(日田市)では24時間降水量が497.0mmを観測するなど県内では大雨となった(気象庁発表)。これらの大雨により県内の各地で洪水や土砂災害が発生。由布市や日田市では6名もの人的被害が発生するなど豪雨に伴い県内では甚大な被害が発した。

7月7日に大分県災害対策本部が大分県庁に設置され、県内の災害対応が緊迫したことからセンターでは大分県との「災害対策に係る連携に関する協定」に基づき、センター教職員を対策本部に派遣するなど災害対応に係る支援を実施。また、一般国道210号が由布市から日田市にかけ全線で被災したことを受け、国土交通省九州地方整備局大分河川国道事務所との連携・協力協定により緊急災害対策派遣ドクター(TEC-DOCTOR)を現地に派遣し、本災害に対する対応を実施した。

大分県及び国土交通省九州地方整備局大分河川国道事務所との連携協定に基づく災害対応支援



大分県災害対策本部リエゾン派遣



国道210号被災箇所TEC-DOCTOR派遣



日田市への災害対応支援

大分大学における被災地への支援活動

日田市津江地域に対する緊急支援物資の提供

日田市上・中津江村地域に対して、日田市を通じ大分大学の備蓄食料を緊急支援物資として提供し、7月11日に孤立している中津江の避難所にNPO法人リエラを通じて支援物資を搬入。

<支援物資>

水1.5ℓ×384本・500ml×384本・非常用パン2088個



日田市への支援物資の提供と被災地への搬入

日田市・九重町に災害ボランティアを派遣

令和2年7月豪雨の被災地である日田市天瀬町及び九重町へ学生及び教職員延べ72名の「災害ボランティア」を派遣。センターが社会福祉協議会と調整を行い、堆積物の除去や運搬、救援物資の片付け、被災者のニーズ調査及び炊き出しの補助、旅館の駐車場の泥出し及び洗浄等を実施した。

<派遣期間>7月22日、23日、26日、8月1日、2日



日田市天瀬町及び九重町での災害ボランティア活動

災害情報活用プラットフォーム(EDiSON)の活用

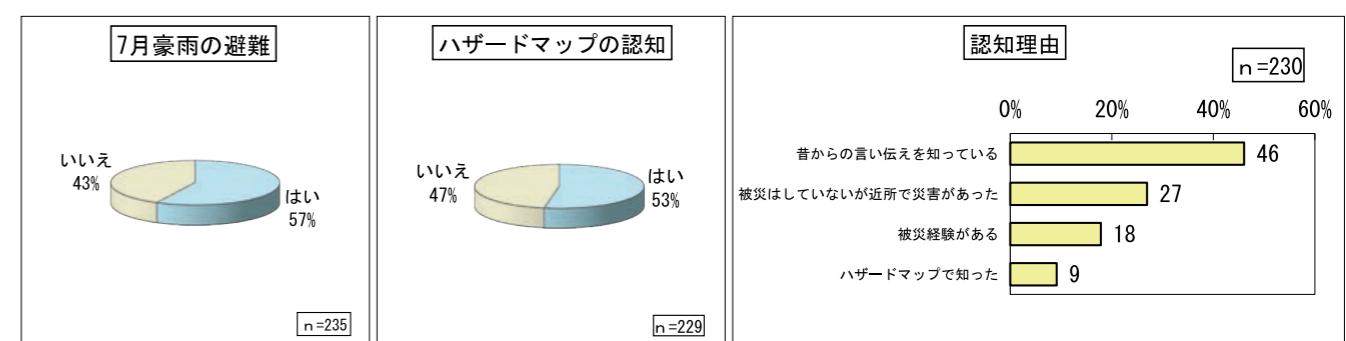
センターが中心となり産学官で開発中の「災害情報活用プラットフォームEDiSON:Earth Disaster Intelligent System Operational Network」を活用し、大分県災害対応支援システムより得られる災害情報(クロノロジー)の分析をはじめ、ドローンで撮影した被災状況などを同システムより国や県、市町村らの関係機関へ公開した。



EDiSONによる大分県災害対応支援システムで受信した災害情報(クロノロジー)と被災箇所の調査及び分析結果

令和2年7月豪雨災害に関する避難行動の実態調査及び復興に関する意識調査

令和2年7月豪雨災害は大分県内で令和になって初の災害となり、被災地域における避難行動の実態把握は学術的な観点から非常に重要な情報である。また、コロナ禍における避難行動の特殊性や、過疎高齢化が著しい地域が抱える避難の難しさ、あるいは観光地の復興に関する地域住民の意識など、大分県にとって今後の災害対応や地域防災、そして復興を進めるうえで貴重な情報となる。そこで9月11日から11月30日にかけてNPO法人リエラ(日田市)の協力のもと日田市(市内、天瀬町、中津江、上津江)住民235名を対象に、災害に伴う避難行動の実態及び復興に関する意識に関してヒアリング(聞き取り)によるアンケートを実施した。



7月豪雨災害における避難行動とハザードマップの認知等

令和2年7月豪雨災害の被災地で学生らが災害復興への課題を学ぶ

11月18日に令和2年7月豪雨で甚大な被害をもたらした宝泉寺温泉(九重町)と天ヶ瀬温泉(日田市)に本学の学生らが訪問し、被災地域の方々による解説とともに被災地の現状と災害復興への課題について学んだ。

本事業は、センターと学生・留学生支援課が主催したもので、7月・8月に両地区に派遣した災害ボランティアに参加した学生や災害ボランティア講習を受講した学生など計34名が参加した。



被災地より復旧の現状と復興への課題を学生らに伝える様子